



催し物

12月17日 「大きなあれ！ペンギンのヒナの体重測定」(～1/19)



ジェンツーペンギンのヒナ(生後20日)

1月12・13日 受験生応援企画「エンペラーペンギンの幸せの黄色い羽根」プレゼント 各日先着100部

1月25日 ダイバーコミュニケーションに「赤鬼ダイバー」が登場(～2/2)



【水族館スクール「もっと知りたい！ダーウィン教室」】

- 12月8日 「ウミガメの命をつなぐ」 小4～6 15名
- 1月19日 「体力勝負!? イルカのトレーナー体験」 小4～6 16名
- 2月9日 「体力勝負!? イルカのトレーナー体験」 小1～3 16名

生物の出来事

2月1日 ペンギン巣立ち終了
※今季のペンギン繁殖数
ジェンツーペンギン1羽、アデリーペンギン1羽

26日 サツキマス展示
名古屋港ガーデンふ頭では名古屋港水族館の調査で初確認



12月17日 干支展示「謹賀新年 海のねずみです」(～1/13)
ネズミゴチ、アカナマコ

1月25日 バレンタイン展示「チョコレートにちなんだ魚」(～2/14)
チョコレートレインボースネークヘッド、チョコレートグラミー



チョコレートグラミー

来訪者

1月7日 三重大学 木村 妙子 教授

2月25日 岐阜大学 楠田 哲士 准教授

講演・その他の出来事

12月14・15日 第60回日本動物園水族館教育研究会柏大会(千葉県柏市)で
ポスター発表

「25周年を迎えた名古屋港水族館ボランティア、
その満足度の高さを運営システムから考える」 吉井 誠

16・17日 東京大学大気海洋研究所 共同利用研究集会
「水族館における教育とアウトリーチ活動。現状と展望。」
(千葉県柏市)で口頭発表
「名古屋港水族館とその解説ボランティアは魚と水、
まさにワンチームである」 吉井 誠

1月11日 ウミガメ博士のスペシャルトークショー
「ロケットとウミガメのつながり in 名古屋港水族館」



1月11・12日 あいち・なごや生物多様性EXPO(名古屋市熱田区) ブース出展

29～31日 第64回水族館技術者研究会(福岡県福岡市)で口頭発表
「シイラの周年飼育例」 岡本 仁

2月15日 令和元年度名古屋港水族館フォトコンテスト入賞作品を展示

【職場訪問・館内レクチャー】

10件 284名

【職場体験】

2件 6名

スマホサイト
<http://www.nagoyaaqua.jp/sp/>
(なお、一部の機種でご覧いただけない場合があります)



ニューズレター「さかなかな」Vol.105 2020年 SPRING
発行/公益財団法人名古屋みなと振興財団 名古屋港水族館
〒455-0033 名古屋市港区港町1番3号 TEL.052-654-7080
URL <http://www.nagoyaaqua.jp>
本誌の掲載記事、写真等の無断複製・複製転載を禁じます。

さかなかな

NEWS LETTER SAKANAKANA SPRING 2020

Vol.105

CONTENTS

- 1 特集
楽しい発見お手伝いします ～名古屋港水族館ボランティア25周年～
- 3 水族館トピックス
- 5 水族研究最前線 ダーウィンの箱
バンドウイルカのハルの成長と餌の管理
わたしのスケッチブック
- 6 ボランティア便利/水族館スクールレポート
- 7 アクアインフォメーション

特集 楽しい発見お手伝いします ～名古屋港水族館ボランティア25周年～

学習交流課 吉井 誠

毎日多くのお客様でにぎわう名古屋港水族館の館内。

そこにオレンジ色の上着を羽織ったスタッフがいることをみなさんご存じでしょうか。よく見ると、そこかしこでお客様と会話をしています。彼らは「名古屋港水族館解説ボランティア」です。1994年に始まった名古屋港水族館のボランティア制度は2019年で25周年を迎えました。当初は約30名でのスタートでしたが、2011年には100名を超え、今年度は208名が登録しています。年齢構成は20代から80代まで、中には25年続けている方もいます。



『解説ボランティアの役割』

「解説ボランティア」とは、いったい何をやる人たちのなのでしょう。彼らは解説を行うことで生き物観察の手助けを行います。かといって、学問的に詳しいことを解説するのともちよっと違います。展示している生物たちは残念ながら言葉を持っていません。私たち人間は言葉を持っています。そんな展示生物と私たちの間に入って橋渡しを担う、ちょうど通訳のような存在です。具体的に言うと、生物へのアプローチの方法、接し方、観察の仕方、それらを伝えることにより今まで見ていなかった何かを発見するきっかけ作りをお手伝いするような役割なのです。

『タッチタンクで活躍中』

25年前に「タッチタンク」という水槽で解説をスタートしました。翌年には「マイクロアクアリウム」という水槽が解説場所に加わり、そのあと徐々に増え、現在は館内の7か所で解説しています。

その中でも「タッチタンク」が主な活躍の場です。そこは地元愛知県知多半島の岩場海岸を再現した水槽で、子どもはもちろん大人にも人気です。展示生物はイトマキヒトデ、マナマコ、サンショウウニなど、季節によってはアメフラシ。これらの水中生物を自分の手のひらに載せて観察することもできます。まさに「タッチ（触れる）」することができる水槽（タンク）なのです。

ここで少しボランティアの活動をのぞいてみましょう。お客様もさまざま、触るのが平気な子、興味津々な子がいます。そんな中に、手を出したいけど出せない子供がいます。ボランティアがやさしく笑顔で話しかけます。「ヒトデさんきれいだね」「こわくないよ」「一緒にやってみようか」その子どもは勇気を出してこわごとと自分の手を水の中に入れます。その手のひらにボランティアがそっとイトマキヒトデを載せます。子どもは驚き、その顔は一瞬ひきつりますが、すぐに満面の笑顔になりボランティアの顔を見上げます。ボランティアも笑顔で返します。こうした生物に対する新たな感動、小さな発見、楽しい驚きがボランティアにより館内で繰り広げられています。



ボランティアのひとことで生物を観る目が変わります。

『ワークショップとボランティア』

また、ボランティアの活躍は館内の展示場所の解説だけに留まっていません。例えばワークショップ。これは誰でも参加OKのイベントですが、これらを開催（計画立案も）しているのもボランティアです。彼らの中からアイデアが出てきます。「チャレンジ！にぼしの解剖」「ちくちくペンギン教室」。どれを聞いても楽しそうです。参加されたみなさんは笑顔。その笑顔に私たちがもなにかほっこりさせられます。それはただ楽しいだけのイベントではありません。例えば『ウミガメフェスティバル』。

こちらでは、ゲームやクイズを楽しみながら知らず知らずのうちにウミガメについて詳しくなっていくます。たくさんのウミガメ博士の誕生です。



ウミガメのワークショップの一コマ。子ガメはどれくらい重さかな。実際に「はかり」で体験します（子ガメからはかりまでボランティアの手作りです）。

『ボランティアとお話してみよう』

水族館は生物を見るだけでも十分楽しいところだと思います。ただ、もし機会があれば館内でボランティアと会話を、そしてワークショップに参加してみてください。みなさんが今まで気づかずにいた生物の不思議さや偉大さや驚きを感じることができるきっかけになるのではないかと思います。



(上) ボランティア全員参加の「野外研修」。知多半島の磯でみられる生物などを観察し、海で感じたことを水族館内のお客様にフィードバックします。
(下) 野外研修に加えて、多い人だと年10回程度研修に参加。積極的に知識を増やしていきます。まずはボランティアが楽しく学び、それらをお客様に伝えていきます。ボランティアは水族館にはなくてはならない存在です。



実際に標本に触ってもらい、飼育係が解説を行いました。

あいち・なごや生物多様性 EXPOに参加しました

1月11・12日に名古屋国際会議場(名古屋市熱田区)で開催された、「あいち・なごや生物多様性 EXPO」(主催：国連生物多様性の10年日本委員会など)に参加しました。水族館からは、現在行っている名古屋港のスナメリ調査について紹介するブースを出展しました。名古屋港にスナメリがいることを初めて知った方も多く、大変驚いていらっしゃいました。またイルカやスナメリの骨格標本、ヒゲクジラのヒゲ板など、様々な標本を展示し、直接触っていただきながら解説も行いました。実際に触れることで大変興味を持っていただき、鯨類の多様さについて理解を深めてもらうことができました。ほかのブースでは各地の学生や企業などの団体が行っている、生物の多様性を守るためのさまざまな取り組みが紹介されていました。今後もこうしたイベントに積極的に参加して、スナメリ調査の結果や取り組みを紹介することで、名古屋港の自然に目を向けてもらうきっかけを作っていきたいと考えています。

飼育展示第三課 加古 智哉

シャチの公開トレーニング ~「アース」メインプール編~

シャチの公開トレーニングでは、トレーニングを通してシャチの生態や行動を紹介しています。

これまで、メインプールでの公開トレーニングは7歳のメスのリンが行っていましたが、昨年10月30日から11歳のオスのアースが行っています。

アース1頭でのメインプールのトレーニングは過去に数回しか行っておらず、慣れていない状態からのスタートでした。スタートしたばかりのころは、ほかのシャチのことを気にして裏の飼育プールに頻繁に帰ってしまうことがありました。最近では、徐々にメインプールにも慣れ、飼育プールに帰ってしまうことも少なくなりました。トレーニングも安定し迫力のあるジャンプを見せてくれるようになりました。時には、客席近くでジャンプすることもあるため、水しぶきでお客様を濡らしてしまわないかが心配になるくらいです。

今後もシャチのすばらしさをお伝えするためにアースと頑張りますので、応援よろしくお願ひいたします。

飼育展示第三課 福本 洋平

※メインプールの公開トレーニングは、動物の状況によりリンとアースが交代で行っています。



メインプールのステージにランディングするアース



12月20日のイベントの様子。このジェンツーペンギンのヒナは、12月8日にふ化し、そのときの体重は61.4gでした。この日の体重は270.0g。順調に大きくなって一安心です。

「大きくなあれ！ ペンギンのヒナの体重測定」を開催しました。

繁殖シーズンを迎えたペンギン水槽では今年もジェンツーペンギンとアデリーペンギンのヒナが生まれました。

ヒナは親鳥が胃の中で一度消化して吐き出した餌を口移ししてもらいますが、日々の観察だけではヒナが満足する十分な量の餌をもらえているか判断がつきません。そのため、飼育係はヒナの体重を毎日測定することによって、ヒナの成長や健康状態を確認しています。

そんなヒナの健康管理のための体重測定を飼育係が解説をしながら公開するイベント「大きくなあれ！ ペンギンのヒナの体重測定」を開催しました。体重測定のために取り上げたヒナをお客様に紹介すると、かわいらしいヒナの様子に歓声が上がっていました。

ヒナの成長はとても早いため約1か月半という短い期間でしたが、「ヒナは昨日より大きくなっているか?」「順調に育っているのか?」、お客様と一緒にかわいいヒナの成長を見守ることができた期間限定のイベントとなりました。

飼育展示第一課 森 昌範

姉妹館のバンクーバー水族館へ行ってきました

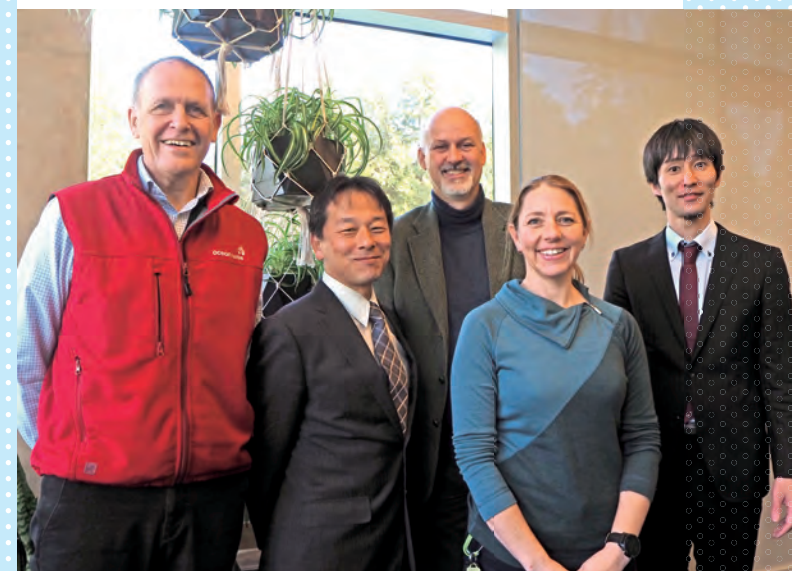
名古屋港水族館は1997年にカナダのバンクーバー水族館と姉妹提携を結びました。これまでに名古屋港水族館で繁殖したアカウミガメを譲渡したり、先方から生物や資料の提供を受けバンクーバー周辺の自然や生物を紹介する特別展を開催したりといった交流を行ってきました。

2月14・15日に名古屋港水族館での新しい展示への協力要請や、今後姉妹館としてどういった交流が望ましいかを意見交換するために訪問しました。

バンクーバー水族館は60年以上の歴史を持つ水族館ですが、2017年にバンクーバー海洋科学センターからOcean Wise(オーシャンワイズ)に組織名を変更しました。そして水族館の運営だけでなく、教育、保全、研究に大きな比重を置いたNPO法人として活動を始めています。展示では海洋プラスチックごみ問題を大きく取り上げていました。

今後の水族館のあり方を大いに考えさせられるのと同時に、新しい展示のための資料提供も約束していただき、実りある訪問となりました。

館長 栗田 正徳



左から：ライト水族館担当役員、筆者、グスタフソンCEO、マッケンジー飼育部長、当館の材津上級主任



このコーナーでは名古屋港水族館で行なわれている保護・研究活動の成果を発表していきます。

バンドウイルカのハルの成長と餌の管理

飼育展示第二課 日比野 真大

2018年5月17日に名古屋港水族館で人工授精によって初めて誕生したバンドウイルカの「ハル」。生まれた時は体長120cm、体重18kg(推定)でした。生後7時間33分後に初授乳を確認し、そこから数か月は母乳を飲んで順調に成長していきました。

生後3か月程で餌の魚に興味を持ち、小さな魚の切れ端をくわえて遊び始めました。そのころから徐々に餌を食べる練習を始めましたが、最初は飼育係からもらった餌を口に含むものの、パクパクと口を動かすだけですぐに吐き出してしまいました。どのようにしたらハルが餌を食べてくれるようになるのかを考え、魚の種類や切り方を変更したり、時にはプールの中に餌を投げ入れて他の個体が水中で食べている様子を見せたりと試行錯誤を繰り返しました。すると徐々に口の中に餌を含んでいる時間が長くなり、生後99日目の2018年8月23日に2~3cmほどの厚さに切ったチカという種類の魚を吐き出さずに飲み込むことができました。

徐々に餌を食べることに慣れてもらい、初めて餌を食べてからさらに3か月が経過するころにはチカだけでなくマサバやニシンも安定して食べられるようになりました。その後も成長に合わせて月に2回ほどの頻度で餌の種類や量の見直しを行い、摂取カロリーを徐々に増加させていきました(右のグラフ)。

餌の見直しに参考とする項目がいくつかあります。ハルは健康管理のために月に1回、血液や呼吸などの検査を行います。また、体長や



体長測定の様子。ハルをプールから引き揚げているため、負担をかけ過ぎないように作業は迅速に行います。

体重の測定を行っています。その測定結果を既知のバンドウイルカの成長曲線と比較し、順調に成長しているかを確認します。併せてトレーニング中の動作も参考にします。

2020年1月の時点では、まだ母乳も飲んでいますが、一日に5kg、カロリーに換算すると7000kcalほどの餌を安定して食べることができています。体長は237cm、体重は154kgとなり、成長は順調です。今後も健康に成長できるように餌を適正に管理していきたいと思っています。

ハルの体重と摂取カロリー



摂取カロリーを徐々に増加させ、それに比例して体重も増加している様子が見えます。生後10-12か月頃は体重の変化が小さくなったため、餌の量などを見直し、摂取カロリーを増加させました。その後、体重は再び増加していきました。

給餌は一日に3回行います。魚種ごとに成分分析を行い、カロリーを計算します。



ボランティア便り 私の館内おすすめポイント ボランティア 笹山 喜代子

南館2階 サンゴクローズアップ水槽

赤道の海コーナーに入ると鮮やかな色の世界が広がります。

サンゴのレプリカが入った水槽、生体サンゴの水槽、そしてお勧めのクローズアップの水槽があり、それぞれの特徴がみられます。クローズアップ水槽では、その名のとおり目の前でサンゴの様子を見ることができ、上からのぞく、少ししゃがんで見る、カメラでクローズアップしてモニターで見るなど、サンゴの生態を楽しむことができます。そして色鮮やかなサンゴの水槽と同じフロアにある、ウミガメの水槽とのコントラストを見比べるのも面白いかと思います。



▲拡大カメラの映像がモニターに映し出されます。小さな「ポリプ」が触手をいっぱい伸ばしている様子が観察でき、たくさんのポリプが集まったものがサンゴだということがよくわかります。



水族館スクールレポート

ワークショップ「チャレンジ! にぼしの解剖」を開催しました



学習交流課 市川 隼平

2月14日は「にぼしの日」(2=に 1=棒=ぼう 4=し)ということで、この時期恒例となってきたボランティア主催のワークショップ「チャレンジ! にぼしの解剖」を今年は2月2日に開催しました。

にぼしはしっかり乾燥しているので手が汚れることがなく、メスもピンセットも使わずに指とつまようじだけで簡単に解剖できるので、魚の体を知るのにはもってこいの素材です。

解剖というと難しそうないメージがありますが、ボランティアがつきっきり丁寧の説明しながら行うので、初めての方でも楽しみながら学んでいただけます。

「まずは解剖する前ににぼしをじっくり観察してみましょう」「背中側とお腹側で色が違うのはなぜだと思いますか」時々アドバイスをし、参加者に考えてもらいながら進めています。

指で体を割って背骨を取り出し、つまようじを駆使して脳や心臓、胃といった臓器に加え、水晶体や耳石といったマイナーな組織も取り出して観察します。大人も子どもも夢中になっていました。イベントは大盛況で、参加者は300名を超えました。このイベントをきっかけに、にぼしを見る目が変わり、さらにはほかの魚にも興味を持っていただければと思います。



▲「ここが鼻の穴ですよ。」ボランティアが丁寧に教えます。



▲取り出した臓器と組織は後から振り返ることができるように専用の台紙に貼っていきます。

わたしのスケッチブック

飼育展示第二課 (獣医師) 小林 真理沙

【フクロモモンガ】

名古屋港水族館では数少ない、毛のある動物。警戒心が強いので、普段お世話をしていない獣医の私に触られるのは苦手でした。しかし、それでは健康管理ができません。慣れてもらうために、おいしいごはんを用意してから触るようにしていました。地道な努力が実って、最近私の掌の上でも毛づくろいしてくれます。



フクロモモンガ
Petaurus breviceps
獣医は動物に
触られてしまうことが
多いので、
なついてくれると
嬉しくなっています!